The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	トカラ語より翻訳された未比定のウイグル語仏典註釈書
Author(s)	笠井, 幸代
Citation	内陸アジア言語の研究. 2006, 21, p. 21-47
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/16208
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

トカラ語より翻訳された未比定のウイグル語仏典註釈書*

笠井幸代

本誌の19号において筆者は，トゥルファンで出土しベルリンに将来された，未発表の一ウイグル語文書断片 U 971 (T II S 20) を扱った [Kasai 2004]．これは，ウイグル文字楷書体で書かれた貝葉形の文書一葉の断片であり，表側に仏教テキスト，裏側にその奥書がある．本文書は，その形状と表面に附された頁付けから判断して，元来多数の貝葉から成っており，その奥書は，この仏教テキストを翻訳した人物の手により作成された，と考えられる．翻訳者による奥書は，それが附された仏教文献の本文と共に，繰り返し書写され伝えられていくものである．(1) そのためこの奥書を含む文書 U 971 が，実際に書写された年代を決定することは難しいが，そのテキストと奥書の成立年代については，奥書に名前の挙がっている翻訳者の活躍年代を基にして，推測することが可能である．それは，前回の論文で論じたように，おそらくウイグル仏教の最初期，すなわち十世紀後半から十一世紀前半であると推測される [Kasai 2004, 8-9]．もしこの推測が正しければ，本文書は表面の仏教テキストと裏面の奥書とが両々相俟って，当時のウイグルにおける仏教崇拝の一端を伝える重要な史料となる．

---

* 本稿を執筆するにあたり，ペーター・ツィーメ，森安孝夫両教授，ジモーネ＝クリスティアーネ・ラシュマン，イェンス・ヴィルケンス両博士より，重要な学術的指摘を多数戴いた．ツィーメ博士には，本稿末尾に附したドイツ語の要約も直していただいた．また大阪大学の山本明志氏には，筆者にとって参照が困難であった論文の入手にご協力いただいた．ここに記して感謝したい．本稿に含まれる間違いはもちろん，全て筆者の責任である．

(1) 例えば，ウイグル語訳 *Maitrisimit* には，センギムから発見されたセンギム写本と，ハミから発見されたハミ写本が存在する．後者はおそらく前者よりおよそ一世紀後に書写されたと考えられているが，双方ともに，全く同一の翻訳者奥書を含んでいる [BT IX, Teil I, 215; Geng / Klimkeit / Laut 1998, 57, 126]．

U 971 裏面にある奥書には，この仏教文献の翻訳を依頼した四人の寄進者の名前が挙げられている．そのうちの一人は，「ボクグ (= uig. *bokug*) の起源を持つ」人物であると形容されており，おそらくはウイグル王家出身の女性である．この *bokug* という単語には，二つの意味がある．一つは，" 'a swelling, esp. in the throat' in humans; metaph. 'a bud' "「特に人間ののどの隆起；比喩的に芽，芽状突起」[ED, 313b] という普通名詞であり，もう一つは，ウイグルの伝説的な建国者たるボクグ可汗の名前である．この奥書における *bokug* は，言うまでもなく後者であり，いわゆるボクグ可汗伝説に関わっている．

ボクグ可汗伝説とはウイグルの始祖説話であり，ペルシア語，中国語，そしてウイグル語史料により，現在に伝えられている．(2) それによると，後にウイグル王国の建国者として初代可汗となるボクグは，他の四人の兄弟と共に，天からの光が降り注いで出来た木の「ボクグ(節こぶ)」から生まれたという．さらにボクグが可汗となってから，夢に白衣の人物が現れて予言をしたという逸話を伝える史料もある．これら，五人の子供を生んだ「木」，「天の光」，「白衣の人物」といった要素は，いずれもマニ教において非常に重要視されるものである．それゆえこのようなマニ教的要素を多く含んだボクグ可汗伝説は，マニ教の影響下で成立したと推測されている[Marquart 1912, 486-490; 森安 1991, 167-169; 2004, 200-202]．

この伝説の可汗ボクグには，モデルとなった人物がいると考えられている．それは，八世紀半ばから九世紀半ばにかけてモンゴル高原を支配した，東ウイグル可汗国の第七代可汗，懐信可汗 (在位 795-808) である [安部 1955, 169-197,

---

(2) この伝説を伝える諸史料は以下の通りである：'Alā al-Dīn 'Aṭā-Malik Juwainī の *Ta'rīkh-i Jahān-Gushāy* (13 世紀成立，ペルシア語)；亦都護高昌王世勲碑 (14 世紀成立，中国語とウイグル語の二言語使用)；『元史』巻 122, 巴而朮阿而忒的斤伝；邵遠平『続弘簡録』(＝『元史類編』)；『金華黄先生文集』巻 24, 遼東等処行中書省左丞亦輦真公神道碑．また以下の先行研究も参照せよ：D'Ohsson 1824, 682-685; Bretschneider 1910, 247, 254-259; 山田 1955; 安部 1955, 170-197, 293-300; Boyle 1958, vol. 1, 53-61; 黄 1964; 耿 1980; Geng & Hamilton 1981.

207-210; 森安 1979, 215; 1981, 198; 2002, 146, 註 33; MOTH, XV; Thierry 1998, 270; Tremblay 2001, 32, 註 48, 238]．懐信可汗は，それまで代々，ウイグル可汗を輩出してきたヤグラカル氏の出身ではなく，エディズ氏の出身者として，宰相(= uig. *el ögäsi*)の地位を経て，初めて可汗となった人物である．さらに彼は，マニ教の熱心な保護者としても知られている．マニ教は，懐信可汗時代よりも三十年ほど前に，すでにウイグルに伝えられ，第三代の牟羽可汗時代には，可汗自身の改宗を以て，一旦は東ウイグル可汗国における勢力をおおいに拡大した．しかしその後，国内のマニ教反対派クーデターにより，最大の保護者であった牟羽可汗が殺害されると，マニ教勢力も大幅な後退を余儀なくされたのである[(3)]．このように，いわば閉塞状態にあった東ウイグル可汗国のマニ教に，初めて国教的地位を与え，名実共に復活させたのは，懐信可汗であった．つまりこの可汗は，マニ教にとって極めて重要な人物であり，なおかつ東ウイグル可汗国におけるエディズ王朝の「創始者」なのである．「マニ教的」色彩に彩られたウイグルの伝説的「創始者」であるボクグ可汗のモデルとして，彼ほど相応しい人物はいない[(4)]．

---

(3) 牟羽可汗の改宗と，マニ教を取り巻く状況の変遷に関しては，Clark 2000; 森安 1991, 31-32; 2004, 34-35 等を参照．

(4) なお，この伝説の性格及び，ボクグ可汗のモデルに関しては，異論もある．J. P. アスムッセン氏は，「木」，「天の光」，「白衣の人物」といった要素はマニ教以外にも現れるとして，この伝説にマニ教の影響を見ることに，疑問を呈している [Asmussen 1965, 161-162]．氏の指摘通り，確かにこれらの要素を無理にマニ教的に解釈する必要性はない．しかし上述のように，実際にマニ教とウイグルは非常に密接な関係にあったのであり，こうした状況を考えれば，この伝説をことさらに，非マニ教的に解釈しようと努力しなければならない理由もない．さらにボクグ可汗のモデルとしては，懐信可汗以外にも，第三代の牟羽(= uig. *bögü*)可汗，東ウイグル可汗国の創始者である骨力裴羅，もしくはさらに以前のウイグルの族長である菩薩などが提案されている [v. Le Coq 1912, 147, Blatt I, Seite 2, 149-150; Bretschneider 1910, 256, 註 640; 王 1938, 23-24]．なかでも，ボクグ可汗を牟羽可汗に比定する A. v. ルコック氏の説は，両者の音声学的類似も手伝って，広く受け入れられてきた [TT II, 413; v. Gabain 1949, 58-59; 田坂 1940, 204, 註 34; 1941, 232, 註 32; Clark 1997, 102-103]．しかしながら上述のように，① マニ教と密接な関係をもち，なおかつ ② 新たな王朝，ないしは王国の「創始者」である，というボクグ可汗の持つ両方の条件を満たすのは，懐信可汗でしかありえない．

では，この伝説はいつ成立したのであろうか．現在私たちが目にすることの出来る史料は，全てモンゴル期に作成されたものである．しかしだからといって，この伝説の成立もモンゴル期にまでしか遡れない，というわけではない．伝説は，ボクグ可汗の創設したウイグル王国が後に崩壊し，ウイグル族が王国の中心地であったモンゴル高原から離れたことを伝えて終わっている．一方ウイグルの歴史を見ると，840年，東ウイグル可汗国は，同じトルコ系のキルギス族の攻撃により瓦解し，ウイグル族の大部分は，モンゴル高原を離れて天山地方に西遷，その地に新たに西ウイグル王国を建設する[(5)]．この歴史的事実はまさしく伝説の伝えるところと一致し，ボクグ可汗伝説の完成は，東ウイグル可汗国の瓦解・西遷以後，つまり西ウイグル王国時代に入ってからであると推測される[(6)]．ところがこの西ウイグル王国は，普通，その盛んな仏教信仰で知られている．この王国は，その支配下に仏教徒であるトカラ人や漢人を多数含んでいたため，彼らの影響により，ウイグル人達にも徐々に仏教が浸透した．とくにその初期にはトカラ仏教が，続いて漢人仏教が，ウイグル人による仏教の受容とその後の流行に，非常に大きな役割を果たしたと考えられている[(7)]．しかしながら王国建設当初より十世紀半ばに至るまでは，マニ教の影響は依然として強く，支配者階級であるウイグル人達は，基本的にマニ教徒であった［森安 1991,

---

(5) この西遷の詳しい経緯については，森安 1977 を参照．

(6) 西ウイグル王国時代というのは，あくまで伝説の「完成」についての年代であり，伝説の骨子がすでに東ウイグル可汗国時代に出来上がっていた可能性は十分にある．

(7) ウイグル人へいつ，どのように仏教が伝来したかは，まだ完全には解明されていない重要な問題である．この問題に関しては，大きくわけて二つの説が存在する．ウイグルに仏教が伝えられたのは，ソグド人によるところが大きいと考える説と，それをトカラ人に帰する説である．後者は日本の学者により，前者に代わるものとして唱えられたが，欧米では前者の説もまだ根強い［Laut 1986; 森安 1989; 1990］．しかし，西ウイグル王国において，仏教が本格的に流入し始めた際に，大きな影響を及ぼしたのがトカラ仏教であったということは，ソグド人による仏教伝道を信ずる学者にも，大方で受け入れられている．また，こうしたトカラ仏教の影響力の大きさは，仏教用語の大半が，トカラ語を経由して古代トルコ語に借用されたことからも，裏付けられる［庄垣内 1978; Moerloose 1980］．

147-160; 2004, 174-192]．ボクグ可汗伝説は，こうしたマニ教の影響のまだ強い時期に完成をみたのであろう[8]．

ボクグ可汗伝説が，ウイグル王国，並びに王家の創設に関わる内容であることを考慮すれば，この伝説がウイグル人，なかでもとりわけウイグル王家にとって非常に重要な意義を持っていたことは，明白である．その重要性は，マニ教徒ウイグル人が政権の枢要な地位を占める西ウイグル王国の支配下に入った仏教側にも，十分に認識されていたことであろう．国家的保護を約束してくれる王家への布教が極めて重要であることは，どの宗教にとっても変わりない．とすれば，まさにそのウイグル王家の創設に関わるボクグ可汗伝説を，いくらその内容がマニ教的であるからといって，仏教側が全く無視したとは，やはり考えられない．寧ろ王家への布教の段階で，積極的に取り込んでいったと考える方が，妥当である．事実，仏教側にボクグ可汗伝説が取り込まれていたことを示す証拠はある．現在サンクトペテルスブルグに所蔵されているウイグル語仏教文献の断片 SI D/17 には，この伝説が，仏教的に潤色しなおされた形で現れる[Tuguševa 1996]．この文献はこれまで，仏教側のボクグ可汗伝説を伝える唯一の史料であったが，年代が記載されておらず，そのために一体いつ，ボクグ可汗伝説の「仏教化」が行われたのかを推測することは，不可能であった．この重要な問題を解決する手がかりとなったのが，U 971 の裏面に書かれた奥書なのである．つまり，本仏教文献の翻訳を依頼した四人のうち筆頭寄進者が「ボクグの起源を持つ」と形容されていた事実から，遅くとも本仏教文献成立以前に，すでに仏教側に取り込まれていたと推測することが出来るのである [Kasai 2004]．

---

(8) 山田 1955; 森安 1991, 168; 2004, 201-202．両氏は，ボクグ可汗伝説の完成を，西ウイグル王国時代とする点では同様であるが，その説には若干の違いが存在する．山田信夫氏は，ボクグ可汗伝説において木が重要な役割を果たしていることに着目し，これが，樹木崇拝の伝統を持つアーリア系民族，つまりトカラ人の影響を受けて，成立したと推測した．それに対し，森安孝夫氏は，この伝説がマニ教の影響下に成立したと考えている．

U 971 文書の表面の仏教テキストは，裏面の奥書と同じく，ウイグル語ウイグル文字楷書体で書かれている[9]．前稿で筆者は，裏面にある奥書の紹介とその歴史的意義に重点を置いて論じたため，表面にある仏教文献については全く言及しなかった．そこで本稿では，この表面のテキストと翻訳を発表して，大方の利用に供すると共に，前回のドイツ語論文で紹介した奥書に関する要点を，その成立年代も含めて改めて整理して取り上げ，この仏教文献の性格を出来る限り明らかにすることを，目標とする．

ウイグル語テキスト[10]

1	[	]*w* L'RY : amtı bodi-[11]
	[	]*w* l'ry : 'mty pwdy
2	[satav(?)	]*y*TWR D'CY b(ä)lgü
	[	]*y*twr d'cy plkw
3	[	i]nčip kayu kayu
	[	]ncyp q̈'yw q̈'yw
4	[	]R ärki tep :
	[	]r 'rky typ :
5	[	bilmi]š k(ä)rgäk : kim
	[	]s krk'k : kym
6	[	] tegmä kurug
	[	] tykm' q̈wrwq
7	[	]NW armıš ämgän-

(9) 筆跡から見て，両面を書写した人物は同一であると考えられる．

(10) この断片は，Berlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften in der Staatsbibliothek zu Berlin-Preußischer Kulturbesitz, Orientabteilung に保存されている．当機関が筆者に発表の許可を与えられたことを，ここに記して感謝する．ファクシミリは，両面ともに，前稿で発表済みである[Kasai 2004, Plate I, II]．テキストの転写方式は，UW に従う．

(11) この行の前にもう一行，朱書きされた行の一部が残存している．しかし破損が激しく，解読は不可能である．

[ ]nw ''rmys 'mk'n

8 [miš]*p* bilmiš k(ä)rgäk :

[ ]*p* pylmys krk'k :

9 [bodisa]t(a)v-lar nätägin

[ ]tv l'r n't'kyn

10 [ ] tesär : munı

[ ] tys'r : mwny

11 [ ]DZWN-L'R : kaltı

[ ]dz wn l'r : q̈'lty

12 [a]lp yüräklig bodi-

[ ]lp ywl'k'yk pwdy

13 s(a)t(a)v-lar tolp s'N[ye]*r*tinčü yersuvug m(ä)n

stv l'r twlp s'n[ ]*r*tyncw yyrswvwq mn

14 tegli nom üzä kurug [körü]r-lär : inčip y[o]k

tykly nwm 'wyz ' q̈wrwq [ ]r l'r : 'yncyp y[ ]q

15 kurug körü turup : y(a)rlıkančučı köŋül-lüg *äränq̈wrwq* kwyrw twrwp : yrlyq̈'ncwcy kwnkwl lwk *'r'n*

16 läri-niŋ y(a)rl(ı)gı üzä yeläyü tözkä

l'ry nynk yrlqy 'wyz ' yyl'yw twyz k'

17 /////-L'R: ol *ok* y(a)rlıkančučı köŋül-lüg

///// l'r : 'wl *'wq* yrlyq̈'ncwcy kwnkwl lwk

18 [ ]*w*RYNT' utlı *s*[ävinč] bilmäk üzä bo

[ ]*w*rynt' 'wtly *s*///// pylm'k 'wyz ' pw

19 [ ] //// YYN *särilip* (?) inčä sakıntı-lar

[ ] //// yyn s'*rylyp* 'ync' s'q̈ynty l'r

(頁付け) ek*i* // [ ]WYC *k*[ ]*k*

'yky // [ ]wyc *q̇*[ ]*q̇*

翻訳

〔前略〕

(1-2) ・・・今，菩［薩］・・・相（？）・・・(3-5) ・・・どの様な・・・かと，尋ねるなら，・・・［知らねば］ならない（？）(5-8) もし・・・という空（くう）・・・疲労した$_2$・・・知らねばならない．(9-11) ・・・［菩］薩達が，如何にして・・・と尋ねるなら，これを・・・(11-14) ・・・彼らは・・・しますように！ 勇猛な$_2$菩薩達が，全ての$_2$世界$_2$を，「私」という法を通して空（くう）と［観る］．(14-17)（彼らが世界を）空（くう）$_2$と観るので，慈悲心持つ人々の命令によって，彼らは世俗諦に・・・．(17-19) その慈悲心持つ（人々）［のために］，報いを知ることによって，（彼らは）この・・・に（？）耐えて（？），このように考えた：

［第］二（章）［　　］（？）

語註

7-8 行目 armıš ämgän[miš]： この類語重複（hendiadys）に関しては，UW, 169 を参照．

12-13 行目 [a]lp yüräklig bodis(a)t(a)vlar： 第二の単語 *yüräklig* は，ここでは明確に *YWL'K'YK* と書かれている．しかしこのままでは意味を為さない．この単語の直前に *alp* "brave"「勇猛な」[ED, 127b] が現れることから考えて，おそらくここは *YWR'KLYK* の誤記であり，*L* のフックが誤って *R* の右側に附されたのであろう．この二つの単語 *alp yüräklig* が類語重複を形成することに関しては，UW, 106 を参照．

13-14 行目 m(ä)n tegli nom üzä kurug [körü]r-lär： ここは「我」の存在が空（無）であること（＝我空，無我）と同時に，この世界が空（無）であることを説いている．BDJT, 158d, 1316c-d 等を参照．

14-15 行目 y[o]k kurug： ウイグル語訳『阿毘達磨倶舎論実義疏』では，漢語の「空（くう）」への対訳に使用されている例がある．庄垣内 1993, 408 を参照．

16 行目 yeläyü töz: *yeläyü* の読みと語形に関しては，OTWF, 408 を参照.[12] *yeläyü* はさほど頻繁には在証されていないが，在証例では一様に "trügerisch, falsch, māyā-artig"「うわべだけの，誤った，欺瞞 (= skt. *māyā*) 的な」と訳されている [BT I, 69; UW, 249b]. *yeläyü töz* という熟語は，モンゴル時代，チベット仏教の影響下でウイグル語訳されたいわゆる Totenbuch『死者の書』に在証されており，そこでは "das falsche Wesen"「誤った本質」と解釈されている [Zieme & Kara 1978, 857, 868, 879, 884, 898]. 他方，ウイグル語訳『阿毘達磨倶舎論実義疏』においてこの単語は，漢語の「仮」「世俗」に対応しており，*yeläyü töz* は，「世俗の根本，本質」と解釈できる.[13] つまりは仏教で言うところの「世俗諦」に対応するのであろう.「世俗諦」は，究極の真理である「勝義諦，真諦」に対して，世俗的立場での真理であると説明される [BDJT, 784c-785b, 819c-d]. すなわち「勝義諦，真諦」の立場から見れば，表面的な真理であるにすぎず，"das falsche Wesen"「誤った本質」という Totenbuch における *yeläyü töz* の訳は，『阿毘達磨倶舎論実義疏』における漢語との対応から導き出された「世俗諦」という訳と矛盾しない.

17 行目： 最初の単語は，破損が激しいために，ほとんど解読不能である. 確実なのは，最後の複数形語尾 + *lar* / + *lär* の読みだけである. あるいは *en-* "to descend, come down"「下る，降りてくる」[ED, 168] のアオリスト形 *enär-lär* を読みとるべきかも知れないが，確実ではない.

18 行目 utlı *s*[ävinč]： *utlı* の後に，*S* が明確に読みとれるので，*sävinč* を補うことが出来る. この類語重複に関しては，ED, 54b; BT XIII, 12.015, 12.017, 12.023, 12.031, 46.1 等を参照.

19 行目 *särilip* (?)： 最初の *S*，中頃の *L*，そして最後の *P* が比較的明確に読みとれるため，筆者はこの箇所を上記のように解釈した. しかし，その他の部分は破損が激しいため，この読みは完全に確実なものではない.

---

(12) M. エルダル氏の著書にこの単語への言及が存在することは，J. ヴィルケンス氏より指摘していただいた. ここに記して感謝する.

(13) 庄垣内 1993, 402. なお庄垣内正弘氏はこの単語を，*yılayu* と読んでいる. この単語の「世俗」という意味は，M. エルダル氏によっても挙げられている [OTWF, 408].

頁付け **eki** // [ ]wyc *k*[ ]*k*： かつて筆者は，この頁付けを *eki-[nti] üč kırk* と読もうとした[Kasai 2004, 2, 註 4]．しかしながら，破損が激しいため，最初の *eki-* を除いて，確実に解読することは不可能である．ただし筆跡の類似から，少なくともこの頁付けが，本文に属するものであることは，疑いないだろう．極めて異例なことであるが，この頁付けは，表面の右端に附されている．頁付けは普通，裏面の左側に附される．確かに，ウイグル語訳 *Maitrisimit* の Höllenkapitel「地獄の章」のように，裏面に頁付けのある例も存在する．しかしその場合も，頁付けは，右端ではなく左端である[14]．この文書の頁付けはそれゆえ，非常に特異な例である．

さてここで，U 971 の古文書学的情報を再確認しておく：大きさは，22.8 x 38.6 cm, 紙色はベージュであり，文字に対して水平方向に漉き縞が確認できる．表面では左側の上半分，裏面では下半分にあたる部分が，大きく欠落している．書体は前述の通り楷書体で，両面ともに，上下の境界線と各行の中心線が，朱で入れられている[15]．

表面に関して特筆すべき事は，残存部分のうち，最初の二行が朱書きされているという事実である．ウイグル語仏教文献において，*bodhis(a)t(a)v*「菩薩」や *burhan*「仏陀」等のような重要な仏教用語が朱書きされることは，よくある[16]．また，行全体が朱書きされる例として，偈頌(= skt. *gāthā*)の翻訳では最初の一句目が，註釈書においては経典本文からの引用部分が，それぞれ朱書きされる場

(14) ウイグル語文書の頁付けに関しては，v. Gabain 1964, 176-177; Laut 1986, 149-161 を参照．頁付けにおいて，巻数が記されることなく，葉番号だけが附されている場合が存在する．例えば，U 715 [T I D] において，本来の頁付けは葉番号だけで，巻数は後から付け加えられたものである．一方頁付けが表面の右端に附されている唯一の例は，マニ教の貝葉本である [TT III, 特に 184, 註 1; Clark 1982]．この貝葉本はしかし，マニ文字で書かれており，その読み方に従えば，頁付けはテキストの冒頭に来ることになる．そのため，頁付けがテキストの末尾に来る U 971 と，単純に比較することは出来ない．

(15) 文書情報に関しては，前回の論文においても，特に裏面を中心に詳述している [Kasai 2004, 2]．

(16) 一例として，ウイグル語訳『仏説天地八陽神呪経』が挙げられる [TT VI; 羽田 1915]．

合のあることが，知られている．前者の例としては，『梁朝傅大士頌金剛経並序』，後者の例としては『妙法蓮華経玄賛』のウイグル語訳が挙げられる［BT I; 百済1983b, 197-198］．偈頌の翻訳と註釈書における朱書きの最も大きな違いは，その長さに認められる．上に挙げた両文献は，いずれも漢語から翻訳されたという点では共通している．ただし『梁朝傅大士頌金剛経並序』における偈頌部分は，そもそも手本である漢文の一句が，韻文であるために散文の一文に比べて短く，それぞれの句の長さも，当然のことながら統一されている．対応するウイグル語訳は，韻文で書かれてはいないものの，こうした傾向を受け継いでいる．ウイグル語訳『梁朝傅大士頌金剛経並序』では，それぞれの句の末尾に句読点が配されているが，どの句もほぼ同じ長さであるために，非常に規則的である．またその一句は，散文の一文に比べればやはり短く，そのために，朱書きされている部分も，いきおい短くなる．それに対し，ウイグル語訳『妙法蓮華経玄賛』では，そもそも漢文原典が散文で書かれているため，こうした傾向は全く認められない．そこでは，経典からの引用部分がすべて朱書きされており，その長さは引用部分の長短による．もちろん句読点が規則的に配されていることもない．翻って U 971 の表面を見てみると，規則的に句読点が配されている様子はなく，それぞれの文の長短もまちまちで，韻文の翻訳であるという印象を与えるものではない．さらに朱書きの部分は，残存しているだけでも二行と長く，『梁朝傅大士頌金剛経並序』よりは『妙法蓮華経玄賛』の形式に非常によく似ている．こうした点を考慮すれば，U 971 の表面はやはり，註釈書の一部であったと考えるべきであろう．とすれば，『妙法蓮華経玄賛』の例から見て，朱書きされた残存している二行が，ある経典からの引用部分であり，その後の部分はそれに関する註釈であったはずである．(17)

(17) ウイグル語の仏教註釈書において，経典からの引用部分が朱書きされている例としては，上に挙げた『妙法蓮華経玄賛』の他に，『大方広円覚修多羅了義経』の註釈書がある［百済 1992, 4-12］．しかし，全てのウイグル語仏教註釈書が，このような形式を採用しているわけではない．例えば，『阿毘達磨倶舎論本頌』への註釈のように，引用部分が朱書きされていない註釈書も存在する［百済 1980］．

それではU 971の表面は一体どんな仏教文献の註釈書であったのであろうか．それは，残存部分のどこにも題名が記されていないために，一見して判明するものではない．また内容に注目してみても，断片的なテキストからは，残存している部分が「空（くう）」に関する教えを説いている，ということが読みとれるだけである．そこには特定の宗派的傾向を見いだすことはできない．ただ，裏面に奥書が書かれていることを考え合わせれば，U 971の表面が，ある章もしくは巻の最後の葉を構成していたことが判明する．[18]

(1) さて，四亀茲（クチャ）[出身の]・・・(2) 全ての論[に]・・・(3) 精通した[尊敬に値] (4) する菩薩 ・・・[が，]・・・[を]・・・[語]に (5) 訳した．・・・(6) この五濁の[世に]・・・(7) 天中の天たる[仏陀]・・・(8)・・・にて，最も深い・・・(9)・・・信仰・・・(10-12) [天中の天たる] 仏陀の[生きていた] 時代の Viśākha Mr[gāramātr のような] 王妃達の(系譜)，・・・(13-14) Śākya-Bäg の[王達の] 系譜にあるべき・・・の種の優曇華（のようで）(15-16) ボクグ（= uig. *bokug*）の起源を持つ蓮の華の（ような）T(ä)ŋrikän Takın Kız T(ä)ŋrim，(16-17) Kıvır- 宰相たる Alp Kutlug Ogul Küdägü Sävig To[to]k，(17) [Ars]lan Ögä Bäg，(18) Kiš Köz Bilgä Bäg 殿下達のご依頼によって，(19-20) 法師たる完全なる賢きシーラセーナ尊師阿闍梨（= uig. *Š[ilaz]en Kši Ačari*）が新たにトルコ[語に翻訳した・・・．[19]

U 971の表面に関する更なる情報は，裏面の奥書の中にみられる：
奥書の 1～5 行目によればこの註釈書は，亀茲（クチャ）出身のある学者によって，

---

(18) ただしこの葉をもって註釈書が終わっていたと断定することはできない．なぜならこのような寄進者への言及のある奥書は，ある文献の最後尾のみならず，それぞれの章や巻の終わりにも附されることがあるからである．例えば『金光明最勝経』の第二巻への奥書 *U 9038 (T III M 56.12) [Raschmann 1998]，*Maitrisimit* の第一章への奥書 U 3807 + 3803 + 3615b (T II S 2 B 102) [Laut 2002b] を参照せよ．

(19) Kasai 2004, 4 を参考に，筆者が日本語に翻訳した．なお，前稿の日本語要旨にも，この部分の翻訳は掲載してあるが，欠落を補った部分の表示など，若干異なる部分があるので，ここに訂正する．

yaratmiš「翻訳さ」れた，もしくは「作成さ」れたものである．[20] この人物が註釈書を「作成した」にせよ「翻訳した」にせよ，彼の出身地がトカラ仏教の中心地の一つ，亀茲であることを考慮すれば，それがトカラ語で書かれていたことに，間違いはない．この作品をウイグル語へ翻訳した人物の名前は，19～20 行目に明記されるようにシーラセーナ (= uig. *Šilazen*, skt. *Śīlasena*) である．彼は，トカラ語からウイグル語への翻訳者として名前の知られている，数少ない人物の一人であり，その活躍時期は当然，トカラ仏教の影響力の強かった時期に一致すると考えられる．

既に述べたように，ウイグルが仏教を受け入れるにあたり，大きな役割を果たしたのはトカラ仏教であったが，後にはもっぱら漢人仏教が，ウイグルに対して強い影響力を持つようになる．実際，十世紀末～十一世紀の初頭には，漢語からウイグル語への翻訳者が活動し始めており，この時期には既に，ウイグル仏教の源泉がトカラ仏教から漢人仏教へ移りつつあったと，推測される．[21] ただ漢人仏教が，西ウイグル王国において圧倒的な影響力を振るい始めるには，もう少し時間がかかったであろうから，トカラ仏教の影響も十一世紀初頭にすでに，完全に消え去っていたとは考えられない．またトカラ語からの翻訳も，その大半はやはり漢人仏教の影響が強まり，漢語からの翻訳が盛んになる時期に先行するであろうが，漢語からの翻訳とトカラ語からの翻訳が一定期間，平行して行われていた可能性は，十分にある．とすれば，トカラ語からウイグル語への翻訳者であったシーラセーナの活躍時期も，西ウイグル王国において仏教が流入し始めた時期から，漢人仏教の影響が圧倒的に強まると考えられる頃まで，つまり十世紀後半から十一世紀前半ごろである可能性が高いといえよう．彼の作品についても，その作成年代は当然，この時期に年代決定されるべきである．シーラセーナの翻

---

(20) 以前の翻訳で筆者は，この単語を「翻訳する」と解釈した，上記引用の奥書五行目の翻訳を参照．しかしながら後で論ずるように，他の解釈の可能性も存在する．

(21) 漢語からウイグル語へ多数の作品を翻訳したことで有名な *Šiŋko Šäli Tutuŋ* の活躍は，この時期に年代決定されている [TT VII, 54; Bazin 1974, 339-346; 森安 1985, 59-60; Zieme 1989].

訳作品としてはこれまでに，唯一，*Daśakarmapathāvadānamālā* (= *DKPAM*)『十業道物語』のみが知られている.[22] *DKPAM* も，もちろんトカラ語から翻訳されてはいるが，U 971 のような註釈書ではない．また，両者の内容に一致する箇所がないので，U 971 が *DKPAM* の註釈書である可能性も否定される．つまり U 971 は，シーラセーナの第二の翻訳作品となるのである.[23] ウイグル仏教の最初期に，シーラセーナという訳経僧が活躍し，一般大衆教化用の *DKPAM* と並行して，僧侶用の高度な註釈書もトカラ語からウイグル語に翻訳したという事実のもつ意義は真に大きい．

ウイグル語仏教文献中には，経典と比べればその数は少ないものの，いくつかの註釈書の翻訳も発見されている.[24] しかしながらこれらは，その原典が比定されている限りにおいて，全て漢語からの翻訳である．U 971 はそれゆえ，現時点では唯一の，トカラ語より翻訳されたウイグル語仏教註釈書の断片であり，その史料的価値は高い．

この註釈書が，トカラ語からの翻訳文献であるという事実を考慮に入れれば，その原典は，トカラ語で保存されている文献，もしくはトカラ仏教において重視されていた文献中に，求めるられるべきであろう．トカラ仏教の中心地であった亀茲（クチャ）・焉耆地方において，部派仏教の一派である説一切有部(= skt. *Sarvāstivādin*)が広く行われていたことは，この地を訪れた玄奘三蔵によっても報告されており，良く知られた事実である.[25] また実際に，現存しているトカラ語仏教文献の研究からも，トカラ仏教のこの宗派への帰属が指摘されている [Schmidt 1985].

---

(22) この文献に関しては，U IV 679; Laut 1984a; 2002a; 庄垣内 / Tugusheva / 藤代 1998; Geng & Laut 2000; Wilkens 2003; 2004; VOHD 13.10 を参照.

(23) 管見の限り，ベルリンのトルファン収集品中には，他にこのテキストと同一文書であると思われる断片は見つからなかった.

(24) これまでに発見された註釈書は，J. エルベルスコック氏により整理されている [Elverskog 1997, 74-85]．その他には，『金光明最勝王経』と『大方広円覚修多羅了義経』への註釈書が存在する，Zieme 1996; Raschmann 1997; 2000; VOHD 13, 15, Nr. 713-715; 百済 1992 を参照.

(25) 『大唐西域記』(T 2087)，巻 51, 870.

これまでに知られているトカラ語仏教文献の大部分は，Avadāna や Jātaka などの説話文献である．だからといって，註釈書が皆無なわけではなく，数は少ないものの，いくつかはその存在が報告されている．[26] その数少ない註釈書を見ても，K. T. シュミット氏により指摘された説一切有部とトカラ仏教の緊密な関係は，明確に現れている．この宗派の特徴は，阿毘達磨論書への傾注が強いことであるが，これまでに発見され，内容が比定されたトカラ語の註釈書は，阿毘達磨論書に関するものがその大半を占めている．[27] また阿毘達磨論書以外の註釈書で，分量の多いものとしては *Udānavarga* へ附された註釈書である，*Udānālaṃkāra* が有名だが，そこにさえ阿毘達磨論書の影響がみられるという．[28]

ただし，トカラ仏教が説一切有部に属していたにしては，これまで発見されているトカラ語訳の阿毘達磨論書の数は，驚くほどに少ない．それにはもちろん，トカラ語仏教文献の全容がまだ十分には解明されていないことも関係しているだろうが，その他にトカラ人自身に帰される要因として，百済康義氏は，当時のトカラ学僧たちのサンスクリット語理解能力の水準の高さを推測している．すなわち学僧たちはサンスクリット語を解し得たのであり，「古代インド語等からのトカラ語への訳経は，大衆教化に直接役立つような本縁部を主とする経典類にこそ意味があったのであり，アビダルマ論書という煩瑣きわまりない専門的な学術書をわざわざトカラ語訳する必要性は，それほど大きくなかった」のであろうと［百済 1974, 22-23］.

(26) トカラ語文献とその研究に関しては，K. T. シュミット氏がその全体像を概観しており，そこにこれまでの研究や，トカラ語文献に関する簡単な紹介論文も引用されている［Schmidt 1994］．氏によって取り上げられなかった紹介論文としては，井ノ口泰淳氏のものがある［井ノ口 1958a, b］.

(27) トカラ語の阿毘達磨論書に関して，筆者が把握している研究論文は以下の通りである，井ノ口 1961, 340-342; 百済 1974; 1983a; 1986. この他にも比定の終わっている註釈書が存在するかも知れないが，トカラ語の専門家ではない筆者には，把握できなかった．専門家のご指摘を頂ければ幸いである．

(28) *Udānālaṃkāra* に関しては，Sieg & Siegling 1933; 1949; 1953, 190-192; Lévi 1933, 72-77, Text A(1)-(4) 等 を参照．*Udānālaṃkāra* における阿毘達磨論書の影響は，百済康義氏により指摘されている［百済 1972］．なお，*Udānavarga* 自体は，説一切有部所伝である，Schmithausen 1970, 特に 89-114 を参照．

トカラ語の註釈書の形式には，残存しているそう多くはない例から見ても，現時点で二通りあったことが判明する．*Udānālaṃkāra* においては，経典からの引用部分，それに対する註釈部分ともに一貫して，全編トカラ語で書かれている．それに対し阿毘達磨関係の註釈書では，まず最初にサンスクリットの原典がそのまま引用され，それがトカラ語に訳されたあと，トカラ語で註釈が附されている．さらに特筆すべきは，これら現存しているトカラ語註釈書が，トカラ語独自の作品である可能性が高いことである．*Udānālaṃkāra* はこれまでにただ，トカラ語版が発見されているのみである．また阿毘達磨関係の註釈書に関しても，百済康義氏によれば，そのうちのいくつかは，トカラ語で独自に作成された可能性があるという［百済 1974, 30; 1983a, 469］．

前述のように，内容によって U 971 の表面にあたる仏教註釈書の原典を比定することは，その断片的な状態のために，非常に困難である．筆者も，比定作業の終わっているトカラ語文献中のみならず，特に原典である可能性の最も高い阿毘達磨論書を中心に，比較的参照しやすい漢訳本を頼りに一致箇所を探し求めたが，残念ながら比定には至らなかった．トカラ語仏教文献に関してはもちろん，現在私たちが目にすることのできるものが，当時トカラ語に翻訳された仏教文献の全てであるという保証はどこにもない．むしろ，現在までに失われてしまった文献が，相当数あると考えたほうが，真実に近いであろう．そのなかにはトカラ語独自のもの，もしくは現在漢語でも伝えられている文献であっても，文言に若干違いのあるものが，含まれていた可能性も否定できない．U 971 の表面の註釈書がそのようなトカラ語仏教文献からの翻訳であった可能性も，十分にありうるだろう．(29)

(29)　その際，原典として最も可能性の高いのは，やはり説一切有部所伝の仏教文献であろう．説一切有部所伝の大蔵経は，四つの部門（*Sūtrapiṭaka, Vinayapiṭaka, Abhidharmapiṭaka, Kṣudrakapitaka*）からなっていたとされる．*Sūtrapiṭaka* には *Ekottarāgama, Madhyamāgama, Saṃyuktāgama, Dīrghāgama* の四阿含が，*Abhidharmapiṭaka* には，*Jñānaprasthāna, Prakaraṇapāda, Vijñānakāya, Dharmaskandha, Prajñaptiśāstra, Dhātukāya, Saṃgītiparyāya* が，含まれていたとされる．*Kṣudrakapitaka* は偈頌で編まれた作品を蒐集したもので，*Dharmapada, Udāna, Pārāyaṇa, Satyadṛṣṭa, Śailagāthā, Sthaviragāthā and Anavataptagāthā,* ↗

奥書によれば，U 971 の表面にあたる仏教註釈書は，亀茲(クチャ)出身のある学者によって，*yaratmuš* だという．動詞 *yarat-* は普通，"to make, to create"「造る，創る」[ED, 959b-960a] と訳される．この動詞はしばしば，奥書にも現れ，*ävir-* "to translate"「翻訳する」[ED, 14a] と同義で使用されることも多い．(30) U 971 では，この単語の直前が破損しているために，文脈を頼りに *yarat-* の意味を判断し確定することは出来ない．それゆえ，この註釈書の原典が，トカラ語独自のものであったのか，サンスクリット語よりトカラ語へ翻訳されたものであったのか，判然としない．トカラ仏教の中心地である亀茲(クチャ)・焉耆地方が，インド文化の非常に強い影響下にあったことを考慮に入れれば，もちろん後者の可能性が極めて高い．(31) しかしながら，既に言及したように，現時点で比定されているトカラ語の註釈書のうちの多くについて，トカラ語で独自に作成された可能性が指摘されている．とすれば，U 971 の表面にあたる註釈書の原典に関しても，やはり前者の可能性も完全に否定できないのである．(32)

↘ *Arthavargīyāṇi sūtrāṇi* が挙げられる．説一切有部の *Vinaya* は漢語に翻訳されて良く保存されている．そのうち根本となる *Vinaya* は *Daśādhyāyavinaya* である．これら説一切有部所伝の文献に関して詳しくは，Cox 1995, 29-37; Willemen / Dessein / Cox 1998, 60-93 を参照．なお漢訳阿含経典の部派帰属に関しては，榎本文雄氏の一連の論考がある [榎本 1980; 1984a, b]．

(30) 例えば，BT IX, Teil I, 215 を参照．なお二つの動詞 *yarat-* と *ävir-* の間に，厳密な意味の違いを見いだそうとする研究者も存在する [Beiheft I, 20; Laut 1984b, 153; 1991, 263; Thomas 1983, 235-236; 1986, 278; Geng & Klimkeit 1988, 4]．

(31) 例えば，同じくトカラ語からウイグル語に翻訳された *Maitrisimit* は，先ずサンスクリット語からトカラ語へ翻訳され，その後さらにウイグル語に翻訳されたことが，奥書より知られている，BT IX, Teil I, 215 等を参照．

(32) またもしも U 971 の原典が，トカラ語の阿毘達磨関係の註釈書のような形式を採用していたとすれば，サンスクリット語の原典からの引用部分がウイグル語へ翻訳される際に，一体どのように扱われていたのであろうか．サンスクリット語の原典をそのまま引用し，それを翻訳した上で，さらに注釈を附ける，という三段方式をとる文献を原典として翻訳されたウイグル語文献は，これまで発見されておらず，この問題は，ウイグル訳経史上，非常に興味深いものである．しかし U 971 における経典からの引用部分は非常に断片的であり，仮にこの註釈書の原典が上記のような三段方式で書かれたものであったとしても，サンスクリット語の部分がどう扱われていたかは，残念ながらこの文書からは判明しない．

ウイグル人がどのような過程を経て，仏教を受容したにせよ，トカラ仏教が，ウイグル仏教初期において非常に重要な役割を担ったことに，もはや疑いの余地はない．トカラ語からウイグル語へ翻訳された仏教文献として，これまでにも *Maitrisimit* や *DKPAM* といった作品が発見されている[33]．これらはいずれも，非常に膨大であり，当時の精力的な訳経活動を推測させるにあまりあるものである．ただし現在まで発見されているものは，すべて説話文献を始め，どちらかというと大衆教化に有用と思われる文献であり，翻訳文献の種類という点に関しては，いささか偏った印象があるのは否めなかった[34]．しかしながら U 971 をもって，トカラ語からの翻訳文献のリストに，最初の註釈書を付け加えることが出来る．トカラ語からの訳経活動は，今まで考えられていた以上に熱心に行われていたのであり，その際に選ばれた文献も，単に大衆教化用の文献にとどまることは，決してなかったのである．

トカラ仏教とウイグル仏教の関係は，その重要さにもかかわらず，まだ十分には解明されていない．その一因は，両者の比較研究の難しさにあるだろう．トカラ語文献の全容がまだ明らかになっていない上に，丁度，本論文で扱った文書がその一例となったように，都合良く両方の言語に保存されていて，その内容を比較検討することの出来るような文献が，なかなか発見されないのである．しかし現在，このような得難い文献の一例である *Maitrisimit* に関して，トカラ語学者とトルコ語学者による共同研究が精力的に進められている．こうした研究からこれまで知られていなかった両仏教の関係の一端が明らかになることは，十分に期待される[35]．この小論が少しでもこうした共同研究

(33) この他に，*Araṇemi-Jātaka* もトカラ語から翻訳された可能性がある [MOTH, No.1]．

(34) *Maitrisimit* のトカラ語版は，その題 *Maitreyasamiti-nāṭaka* 中に *nāṭaka*「劇」を含むことからも分かるように，部分的に韻文で書かれた戯曲であったことが明らかとなっている [Winter 1984]．他方，トルコ語版は，このトカラ語版を原本としているものの，散文で書かれており，それ自体が，劇曲として使用されたことはなかったと推測される [小田 1990, 41-42; Röhrborn 1994]．

(35) この共同研究の成果は既に一部発表されている [Geng / Laut / Pinault 2004a, b]．

に寄与することができ，研究の進展と共に，この註釈書の原典が明らかになる日が来ることを願うばかりである．

文献目録

安部健夫

1955 『西ウイグル国史の研究』京都，彙文堂書店．

AoF: *Altorientalische Forschungen.*

AOH: *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae.*

APAW: *Abhandlungen der Preußischen Akademie der Wissenschaften*, phil.-hist. Klasse.

Asmussen, J. P.

1965 *X^{u}āstvānīft.* Studies in Manichaeism, Kopenhagen.

Bazin, L.

1974 *Les calendriers turcs anciens et médiévaux*, Thèse présentée devant l'Université de Paris III, le 2 déc. 1972, Lille: Université de Lille III, Service de Reproduction des Thèses.

BDJT: 中村元『仏教語大辞典』東京, 東京書籍, 1975.

Beiheft I: v. Gabain, A., *Maitrisimit. Faksimile der alttürkischen Version eines Werkes der buddhistischen Vaibhāśika-Schule I*, Wiesbaden, 1957.

Boyle, J. A. (trans.)

1958 *The History of the World-Conqueror*, 2 vols, Manchester.

Bretschneider, E.

1910 *Mediaeval Researches from Eastern Asiatic Sources*, vol. 1, London. (Rep. 1987, Osnabrück)

BT I: Hazai, G. & Zieme, P., *Fragmente der uigurischen Version des "Jin'gangjing mit den Gāthās des Meister Fu"* nebst einem Anhang von T. INOKUCHI, Berlin, 1971.

BT IX: Tekin, Ş., *Maitrisimit nom bitig.* Die uigurische Übersetzung eines Werkes der buddhistischen Vaibhāṣika-Schule, Teil I-II, Berlin, 1980.

BT XIII: Zieme, P., *Buddhistische Stabreimdichtungen der Uiguren*, Berlin, 1985.

Clark, L. V.

1982 The Manichean Turkic *Pothi-Book*, in: *AoF* 9, 145-218.

1997 The turkic manichaean literature, in: P. Mirecki & J. BeDuhn (eds.), *Emerging from Darkness*: Studies in the recovery of manichaean sources, Leiden, New York, Köln, 89-141.

2000 The Conversion of Bügü Khan to Manichaeism, in: R. E. Emmerick / W. Sundermann / P. Zieme (eds.), *Studia Manichaica* IV. Internationaler Kongreß zum Manichäismus, Berlin, 14.-18. Juli 1997, Berlin, 83-123.

Cox, C.

1995 *Disputed Dharmas Early Buddhist Theories on Existence*. An Annotated Translation of the Section on Factors Dissociated from Thought from Saṅghabhadra's *Nyāyānusāra*, Tokyo.

D'Ohsson, C.

1824 *Histoire des Mongols, depuis Tchinguiz-Khan jusqu'à Tamerlan*, Paris.

ED: Clauson, G., *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth-Century Turkish*, Oxford, 1972.

Elverskog, J.

1997 *Uigur Buddhist Literature*, Silk Road Studies I, Turnhout.

榎本文雄

1980 「Udānavarga 諸本と雑阿含経，別訳雑阿含経，中阿含経の部派帰属」『印度学仏教学研究』56, 933-931.

1984a 「説一切有部系アーガマの展開 ——『中阿含』と『雑阿含』をめぐって ——」『印度学仏教学研究』64, 1073-1070.

1984b 「阿含経典の成立」『東洋学術研究』23-1, 93-108.

v. Gabain, A.

1949 Steppe und Stadt im Leben der ältesten Türken, in: *Der Islam* 29-1, 30-62.

1964 Alttürkische Schreibkultur und Druckerei, in: L. Bazin et al. (eds.), *Philologiae Turcicae Fundamenta II*, Wiesbaden, 171-191.

耿世民

1980 「回鶻文《亦都護高昌王世勲碑》研究」『考古学報 』1980-4 = 耿世民『新疆文史論集』北京, 2001, 400-434.

Geng Shimin & Hamilton, J.

1981 L'inscription ouïgoure de la stèle commémorative des iduq qut de Qočo, in: *Turcica* 13, 10-54.

Geng Shimin & Klimkeit, H.-J.

1988 *Das Zusammentreffen mit Maitreya*. Die ersten fünf Kapitel der Hami-Version der Maitrisimit. In Zusammenarbeit mit Helmut Eimer und Jens Peter Laut, Teil I: Text, Übersetzung und Kommentar, Wiesbaden.

Geng Shimin / Klimkeit, H.-J. / Laut, J. P.

1998 *Eine buddhistische Apokalypse*. Die Höllenkapitel (20-25) und die Schluṣkapitel (26-27) der Hami-Handschrift der alttürkischen Maitrisimit, Wiesbaden.

Geng Shimin & Laut, J. P.

2000 Aus der Einleitung der uigurischen *Daśakarmapathāvadānamālā* aus Hami, in: *TDA* 10, 5-15.

Geng Shimin / Laut, J. P. / Pinault, G.-J.

2004a Neue Ergebnisse der *Maitrisimit*-Forschung (I), in: *ZDMG* 154-2, 347-369.

2004b Neue Ergebnisse der *Maitrisimit*-Forschung (II): Struktur und Inhalt des 26. Kapitels, in: *SIAL* 19, 29-94.

羽田亨

1915 「回鶻文の天地八陽神呪経」『東洋学報』5-1 = 『羽田博士史学論文集下巻　言語・宗教編』京都, 1958, 64-135.

黄文弼

1964 「亦都護高昌王世勲碑復原並校記」『文物』1964-2 = 新疆社会科学院考古研究所（編）『新疆考古三十年』新疆, 458-466.

井ノ口泰淳

1958a 「トカラ語仏典の性格（一）」『印度学仏教学研究』6-1, 178-181.

1958b 「トカラ語仏典の性格（二）」『宗教研究』154, 278-279.

1961 「トカラ語及びウテン語の仏典」西域文化研究会（編）『西域文化研究 4 中央アジア古代語文献』京都, 法蔵館, 317-388.

JA: *Journal Asiatique*.

Kasai, Y.

2004 Ein Kolophon um die Legende von Bokug Kagan（要旨：ボクグ可汗伝説に関する一奥書）, in: *SIAL* 19, 1-27.

百済康義

1972 「トカラ語仏典 *Udānālaṃkāra* におけるアビダルマ的註解」『仏教学研究』29, 37-62.

1974 「トカラ語Bによるアビダルマ論書関係の断片について ―― I: Abhidharmāvatāra-prakaraṇa 註 ――」『仏教文化研究所紀要』13, 21-36.

1980 「ウイグル訳『倶舎論頌註』一葉」『印度学仏教学研究』28-2, 944-940.

1983a 「トカラ語Bによるアビダルマ論書関係の断片について ―― II: Pañcavastuka 註 ――」『印度学仏教学研究』32-1, 473-468.

1983b 「妙法蓮華経玄賛のウイグル訳断片」護雅夫（編）『内陸アジア・西アジアの社会と文化』東京, 山川出版社, 185-207.

1986 「トカラ語Bによるアビダルマ論書関係の断片について ―― III: Abhidharmadīpa 註 ――」『印度学仏教学研究』34-2, 882-875.

1992 「ウイグル訳『円覚経』とその註釈」『龍谷紀要』14-1, 1-23.

Laut, J. P.

1984a Zwei Fragmente eines Höllenkapitels der uigurischen Daśakarmapathāvadānamālā, in: *UAJb* N.F. 4, 118-133.

1984b Rezension zu Tekin, Ş., *Buddhistische Uigurica aus der Yüän-Zeit*, in: *ZDMG* 134-1, 152-156.

1986 *Der frühe türkische Buddhismus und seine literarischen Denkmäler*, Wiesbaden.

1991 Die Gründung des buddhistischen Nonnenordens in der alttürkischen Überlieferung, in: I. Baldauf / K. Kreiser / S. Tezcan (eds.), *Türkische Sprachen und Literaturen*. Materialien der ersten deutschen Turkologen-Konferenz Bamberg, 3.-6. Juli 1987, Wiesbaden, 257-274.

2002a Die zehn Gebote auf Alttürkisch: Betrachtungen zur *Daśakarmapathāvadānamālā*, in: *SIAL* 17, 61-76.

2002b Gedanken zum alttürkischen Stabreim, in: M. Ölmez & S.-C. Raschmann (eds.), *Splitter aus der Gegend von Turfan*. Festschrift für Peter Zieme anläßlich seines 60. Geburtstags, Istanbul / Berlin, 129-138.

v. Le Coq, A. A.

1912 Ein manichäisches Buch-Fragment aus Chotscho, in: *Festschrift Vilhelm Thomsen*, Leipzig, 145-154.

Lévi, S.

1933 *Fragments de textes koutchéens* (Udānavarga, Udānastotra, Udānālaṃkāra et Karmavibhaṅga) = Cahiers de la Société Asiatique. Première série II, 72-77.

Marquart, J.

1912 Ǧuwainī's Bericht über die Bekehrung der Uiguren, in: *SPAW* 1912 Jan.-Juni.,486-502.

Moerloose, E.

1980 Sanskrit Loan Words in Uighur, in: *TUBA* 4, 61-78.

森安孝夫

1977 「ウイグルの西遷について」『東洋学報』59-1/2, 105-130.

1979 「増補：ウィグルと吐蕃の北庭争奪戦及びその後の西域情勢について」流沙海西奨学会（編）『アジア文化史論叢 3』東京, 199-238.

1981 Qui des Ouigours ou des Tibétains ont gagné en 789 - 792 à Beš-balïq?, in: *JA* 269 - 1/2, *Numéro spécial Actes du Colloque international (Paris, 2-4 octobre 1979): Manuscrits et inscriptions de Haute Asie du Ve au XIe siècle*, 193-205.

1985 「チベット文字で書かれたウィグル文仏教教理問答（P.t.1292）の研究」『大阪大学文学部紀要』25, 1-85, +1 pl.

1989 「トルコ仏教の源流と古トルコ語仏典の出現」『史学雑誌』98-4, 1-35.

1990 L'origine du bouddhisme chez les Turcs et l'apparition des textes bouddhiques en turc ancien, in: A. Haneda (ed.), *Documents et archives provenant de l'Asie Centrale*. Actes du Colloque Franco - Japonais organisé par l'Association Franco - Japonaise des Études Orientales, Kyoto, 147-165.

1991 「ウイグル=マニ教史の研究」『大阪大学文学部紀要』31/32.

2002 「ウイグルから見た安史の乱」『内陸アジア言語の研究』17, 117-170.

2004 *Die Geschichte des uigurischen Manichäismus an der Seidenstraße*. Forschungen zu manichäischen Quellen und ihrem geschichtlichen Hintergrund, Wiesbaden.

MOTH: Hamilton, J., *Manuscrits ouïgours du IXe-Xe siècle de Touen-Houang*, 2 tomes, Paris, 1986.
小田寿典
1990 「初期トルコ語仏典の年代に関する課題 ——『マイトレヤとの邂逅』の場合 ——」『豊橋短期大学研究紀要』7, 35-44.
OTWF: Erdal, M., *Old Turkic Word Formation*. A Functional Approach to the Lexicon, 2 vols, Wiesbaden, 1991.
Raschmann, S.-C.
1997 Somaketus Traum von der goldenen Trommel, in: P. Kieffer-Pülz & J.-U. Hartmann (eds.), *Bauddhavidyāsudhākaraḥ*. Studies in Honour of Heinz Bechert. On the Occasion of His 65th Birthday. Indica et Tibetica 30, Swisttal-Odendorf, 537-542.
1998 Aus den Vorarbeiten F. W. K. Müllers zum Altun Yaruk Sudur, in: J. P. Laut & M. Ölmez (eds.), *Bahşı Ögdisi*. Klaus Röhrborn Armaḏanı, Freiburg/Istanbul, 295-304.
2000 Bruchstück eines Kommentars zur Beschreibung der zehn *bhūmis*, in: *TDA* 10, 17-24.
Röhrborn, K.
1994 Die alttürkische *Maitrisimit* - Textbuch für theatralische Darstellungen?, in: K. Röhrborn & W. Veenker (eds.), *Memoriae Munusculum*. Gedenkband für Annemarie v. Gabain, Wiesbaden, 99-103.
Schmidt, K. T.
1985 Zur Frage der Schulzugehörigkeit des in tocharischer Sprache überlieferten buddhistischen Schrifttums, in: H. Bechert (ed.), *Zur Schulzugehörigkeit von Werken der Hīnayāna-Literatur*, Teil I, Göttingen, 275-284.
1994 Zur Erforschung der tocharischen Literatur. Stand und Aufgaben, in: B. Schlerath (ed.), *Tocharisch*. Akten der Fachtagung der Indogermanischen Gesellschaft, 239-283.
Schmithausen, L.
1970 Zu den Rezensionen des Udānavargaḥ, in: *WZKS* 14, 47-124.
庄垣内正弘
1978 「'古代ウイグル語'におけるインド来源借用語彙の導入経路について」『アジア・アフリカ言語文化研究』15, 79-110.
1993 『古代ウイグル文阿毘達磨倶舎論実義疏の研究 II』京都, 松香堂.
庄垣内正弘 / トゥグーシェワ, リリヤ / 藤代節
1998 『ウイグル文 Daśakarmapathāvadānamālā の研究 サンクトペテルブルグ所蔵『十業道物語』』京都, 松香堂.
SIAL: 内陸アジア言語の研究 [Engl. Nebentitel: Studies on the Inner Asian Languages]
Sieg, E. & Siegling, W.
1933 Bruchstück eines Udānavarga-Kommentars (Udānālaṃkāra ?) im Tocharischen, in: *Festschrift für M. Winternitz zum siebzigsten Geburtstag*, Leipzig, 167-173.
1949 *Tocharische Sprachreste*. Sprache B. Heft 1. Die Udānālaṅkāra-Fragmente, Göttingen.
1953 *Tocharische Sprachreste*. Sprache B. Heft 2. Fragmente Nr. 71-633. Aus dem Nachlaß herausgegeben von Werner Thomas, Göttingen.

SPAW: *Sitzungsberichte der Preußischen Akademie der Wissenschaften*, phil.-hist. Klasse.
T: 高楠順次郎・渡辺海旭（編）『大正新修大蔵経』東京.
田坂興道
1940 「中唐に於ける西北辺彊の情勢に就いて」『東方学報 東京』11-2, 585-625.
1941 「漠北時代に於ける回紇の諸城郭に就いて」『蒙古学報』2, 192-243.
TDA: *Türk Dilleri Araştırmaları.*
Thomas, W.
1983 Rezension zu Tekin, Ş., *Maitrisimit nom bitig*, in: *UAJb* N. F. 3, 233-240.
1986 Rezension zu Laut, J. P., *Der frühe türkische Buddhismus und seine literarischen Denkmäler*, in: *UAJb* N. F. 6, 274-279.
Thierry, F.
1998 Les monnaies de boquq qaghan des ouighours (795-808), in: *Turcica* 30, 263-277.
Tremblay, X.
2001 *Pour une histoire de la Sérinde*. Le manichéisme parmi les peuples et religions d'Asie Centrale d'après les sources primaires, Wien.
TT II: Bang, W. & v. Gabain, A. Türkische Turfan-Texte II, Manichaica, in: *SPAW* 1929, Berlin, 1929.
TT III: Bang, W. & v. Gabain, A. Türkische Turfantexte III. Der große Hymnus auf Mani, in: *SPAW* 1930, Berlin, 1930.
TT VI: Bang, W. / v. Gabain, A. / Rachmati, G. R., Türkische Turfan-Texte VI. Das buddhistische Sūtra Säkiz yükmäk, in: *SPAW* 1934, Berlin, 1934.
TT VII: Rachmati, G. R., Türkische Turfan-Texte VII, in: *APAW* 1936, Berlin, 1937.
TUBA: *Journal of Turkish Studies (Türklük Bilgisi Araştırmaları).*
Tuguševa, L. Ju.
1996 Ein Fragment eines frühmittelalterlichen uigurischen Textes, in: R. E. Emmerick / W. Sundermann / I. Warnke / P. Zieme (eds.), *Turfan, Khotan und Dunhuang*, Berlin, 353-359, -1pls.
UAJb: *Ural-Altaische Jahrbücher.*
U IV: Müller, F. W. K. (Herausgegeben von A. v. Gabain), Uigurica IV, in: *SPAW* 24, Berlin, 1931.
UW: Röhrborn, K., *Uigurisches Wörterbuch*: Sprachmaterial der vorislamischen türkischen Texte aus Zentralasien, Lief. 1-6, Wiesbaden, 1977-1998.
VOHD 13, 10: Ehlers, G., *Alttürkische Handschriften. Teil 2*, Das Goldglanzsūtra und der buddhistische Legendenzyklus Daśakarmapathāvadānamālā, Stuttgart, 1987.
VOHD 13, 15: Raschmann, S.-C., *Alttürkische Handschriften. Teil 7*, Berliner Fragmente des Goldglanz-Sūtras. Teil 3, Stuttgart, 2005.
王静如
1938 「突厥文回紇英武威遠毘伽可汗碑訳釈」『輔仁学誌』7-1/2, 1-55.

Wilkens, J.

2003 Studien zur alttürkischen *Daśakarmapathāvadānamālā* (1) Die Udayana-Legende, in: *SIAL* 18, 151-185.

2004 Studien zur alttürkischen *Daśakarmapathāvadānamālā* (2) Die Legende vom Menschenfresser Kalmāṣapāda, in: *AOH* 57-2, 141-180.

Willemen, C. / Dessein, B. / Cox, C.

1998 *Sarvāstivāda Buddhist Scholasticism*, Leiden / New York / Köln.

Winter, W.

1984 Some Aspects of 'Tocharian' Drama : Form and Techniques. in: A. Pietrzak (ed.), *Studia Tocharica*, 47-64.

WZKS: *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens und Archiv für Indische Philosophie.*

山田信夫

1955 「ウイグルの始祖説話について」ユーラシア学会（編）『遊牧民族の研究 ユーラシア学会研究報告 2』京都 = 山田信夫『北アジア遊牧民族史研究』東京，東京大学出版会, 1989, 95-106.

ZDMG: *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft.*

Zieme, P.

1989 Die Vorrede zum alttürkischen Goldglanz-Sūtra von 1022, in: *TUBA* 13, 237-243.

1996 Aus einem alttürkischen Kommentar zum *Goldglanzsūtra*, in: Á. Berta / B. Brendemoen / C. Schönig (eds.), *Symbolae Turcologicae*. Studies in Honour of Lars Johanson on his Sixtieth Birthday 8 March 1996, Stockholm, 231-238.

Zieme, P. & Kara, G.

1978 *Ein uigurisches Totenbuch*. Nāropas Lehre in uigurischer Übersetzung von vier tibetischen Traktaten nach der Sammelhandschrift aus Dunhuang Britisch Museum Or. 8212 (109), Budapest.

Zusammenfassung:

Ein Kommentar zu einem unbekannten uigurisch-buddhistischen Text, der aus dem Tocharischen übersetzt wurde

Yukiyo KASAI

Nachdem die Uiguren ihre Herrschaft in der Mongolei verloren hatten, wanderten sie in der Mitte des 9. Jh. nach Westen, ins Tienshan-Gebiet. Dort gründeten sie das Westuigurische Königreich und nahmen den Buddhismus an. Seitdem verbreitete sich der Buddhismus unter den Uiguren schnell. Zweifellos spielte der tocharische Buddhismus bei dieser Aufnahme in erster Linie eine bedeutende Rolle. In der Tat wurden einige uigurische Texte gefunden, die aus dem Tocharischen übersetzt wurden. Im Vergleich mit den Übersetzungswerken aus dem Chinesischen, die Hauptquelle des uigurischen Buddhismus in der späteren Zeit, ist deren Zahl jedoch sehr gering. Darüber hinaus gehören sie alle zur gleichen Textgattung, die eher dwe Belehrung des Volkes dienen sollte. Deshalb hat man auf den ersten Blick den Eindruck, daß Übersetzungen aus dem Tocharischen etwas einseitig sind.

Mit dem uigurischen Fragment U 971 (T II S 20) kann sich dieser Eindruck verändern. Auf beiden Seiten ist der Text in kalligraphischer Schrift geschrieben. Die Rückseite, die einen buddhistischen Kolophon umfaßt, habe ich bereits in *SIAL* XIX veröffentlicht. In diesem Aufsatz behandele ich die Vorderseite. Dem Kolophon nach handelt es sich um einen buddhistischen Text, der von *Śīlasena* ins Uigurische übersetzt wurde. *Śīlasena* ist bekannt als Übersetzer der aus dem Tocharischen ins Uigurische übersetzten *Daśakarmapathāvadānamālā* (= *DKPAM*). Der Text von U 971 kann deshalb als ein weiteres Werk seiner Übersetzungstätigkeit angesehen werden. Unter Berücksichtigung der Ausgangsprache der *DKPAM* ist es sehr wahrscheinlich, daß der betreffende Text auch aus dem Tocharischen übersetzt wurde.

Es ist darüber hinaus sehr bemerkenswert, daß auf der Vorderseite von U 971 die ersten zwei Zeilen rot geschrieben sind. Es wurde bereits erwähnt, daß in einigen uigurischen Kommentar-Texten die Zitate aus den Sūtrs rot geschrieben werden. Im Vergleich mit diesen Texten kann mit hoher Wahrscheinlichkeit auch unser Text ein Kommentar sein. Unter den uigurischen buddhistischen Texten gibt es zwar einige Kommentar-Texte, aber alle wurden aus dem Chinesischen übersetzt, wenn ihre Vorlage überhaupt identifiziert werden konnte. Der Kommentar-Text U 971 ist bisher der einzige, der aus dem Tocharischen übersetzt wurde.

Mit dem Fragment U 971 kann man der Liste der übersetzten Werke aus dem Tocharischen einen Kommentar-Text hinzufügen. Dies weist darauf hin, daß die damalige Übersetzungstätigkeit eifrig war und daß die Auswahl nicht auf eine Textgattung begrenzt wurde.

Die deutsche Übersetzung des uigurischen Textes lautet:

" (1-2) ... Nun Bodhi[sattva] ... das ... Zeichen (?) ... (3-5) Wenn man [fragt], welche ... muß man [wissen ?] ... (6-8) Wenn man die ... genannte Leere ... müde gewordenen$_2$ ... muß man wissen. (9-10) Wenn man fragt, wie die [Bodhisa]ttvas ... dies ... (11-14) ... sollen sie ... Die tapferen$_2$ Bodhisattvas [sehen] die ganze$_2$ Welt$_2$ durch die 'ich' genannte Lehre als leer an. (14-17) Obwohl (sie sie) als leer und nichtig ansehen, [begeben (?)] sie sich durch die Worte der barmherzigen Männer in das illusorische Prinzip. (17-19) Durch das Dankbarkeit$_2$-Erweisen wegen dieser barmherzigen (Männer) halten sie sich in den ... auf (?) und sie denken so:

(Paginierung) zwei ... (?) "